

さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙
1面・「国家神道」「現人神」の幻想
2面・全国学生雅楽フェスティバル
3面・おやさま逸話篇から
4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 072-365-2571
E-mail:wat@sachihiro.com url:http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡



見事に雲散霧消して、ここに紹介しようと思う

終戦の日が近づいている。その日に靖国神社に総理大臣が参拝するかどうかがいつも話題になる。宗教者の立場から、気になる話題であるが、取りあげられ方に違和感があつて、なかなかその意義を見極めにくい、そんな思いがあつた。明治維新以来、神社神道は国策によって「宗教」であるのに、「非宗教」扱いされてきた。総理大臣の靖国神社参拝問題にはそうしたアンビバレンスな神社神道の立場がよく反映されていると思う。

それは、どこからくるものなのか、何なのか、はつきりしない。最近目にした一冊の本が、見事に雲散霧消して、ここに紹介しようと思う。『「現人神」「国家神道」という幻想』新田均著。大学に入学した頃、読まされて読んだ村上重良『国家神道』（岩波新書）は、明治から昭和にかけての政府の宗教政策を非常にわかりやすい図式で説いていた。

『国家神道』は、民族宗教としての神社神道を、二十世紀なかばにいたる固定化した、時代錯誤の国教制度であつた、「国家神道」は、「巨大なイデオロギー装置」として考えられており、また天皇や高祖高宗を現人神として絶対的に崇拝すべきだとする教育が、明治以来この方、ずっと行われていたと、疑いもなく信じさせられていたのである。ところが、最近、神道史研究の側からこうした見方の誤謬を実証的に検証する論文が発表されて、これまでの議論を根元から再検討する必要が生じている。その代表的著作が、新田均『「現人神」「国家神道」という幻想』（PHP研究所刊・2008年）である。

教会の動き

さちひろ



恒例のごどもおぢばがえりが開催されました。当教会からも、狭山隊に混じって参加しました。総勢50人（そのうち狭千廣から子供18人と大人4人）がおぢば帰りしました。以下は、その折に撮ったデジ・カメの写真を時系列に並べたスナップ写真です。

夏のごどもおぢばがえり

朝づとめ：毎朝・6時30分
夕づとめ：毎夕・7時30分
元日祭：午前7時・午後1時30分
春季大祭：1月21日午後1時30分
秋季大祭：10月21日午後1時30分
月次祭：毎月21日 午後1時30分
春・秋季霊祭：3月22日、9月22日 午後1時30分

教会の動き



《編集後記》

「さちひろ」第5号をお届けします。今号は、本来、先月21日発行だったのですが、編者の都合で遅らせ、6日の発行と致しました。巻頭の『「国家神道」「現人神」の幻想』、最近読んだ本の紹介ですが、学生時代に「明治政府は神道を国教とした」「神社は特別の優遇措置を受けた」と習ったが、あれは完全に間違っていたのです。近代日本の宗教を再考するための激しい刺激を与えてくれる一書です。今月下旬に、天理大雅楽部の夏季合宿に呼ばれています。若いエネルギーをもらって、この夏を乗り切りたいと思っております。（わ）

さちひろ 第5号
編集兼発行人・山口 渡
平成17年8月6日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
・072-365-2571



天理の紹介 全国学生雅楽フェスティバル

雅楽と言えば、日本の伝統音楽として最近とくに注目を浴びるようになりましたが、それでもマスコミにその演奏が登場するのは稀で、まだまだマイナーな音楽かも知れません。

東儀秀樹氏によって、雅楽の新しいファンが増えているのですが、伝統音楽としての雅楽に触れる機会は、それほど多くはないと思われ

ます。そういうなかであって、天理(教)には、たくさん雅楽演奏団体がおり、天理大学雅楽部は天理公演が36回、東京公演が30回に及んでいます。

こうした天理を中心とした雅楽演奏グループの裾野は着実に広まってきていると言ってもいいでしょう。



こうした雅楽の中心地となった天理においてこの夏、表題の「第一回全国学生雅楽フェスティバル」が開催されます。今回は、それをご紹介します。

- ・開催日 平成17年8月20～21日
 - ・主催 天理市商工会
 - ・後援 奈良県・奈良県教育委員会
天理市・天理市教育委員会
 - ・主旨 天理市観光協会・朝日新聞社
次の時代を担う若い雅楽演奏家を支援し、演奏発表の場を設け学生同士の交流を図ります。
 - ・場所 天理市民会館
 - ・内容 参加団体による演奏(雅楽・舞楽)の発表
 - ・参加資格 学校の雅楽クラブ(小学・中学・高校・大学) 23才以下で構成された雅楽演奏団体、並びに有志団体 カルチャー・スクール等で雅楽を学ぶ生徒による有志の団体
 - ・団体数 15団体
- 詳細は、
http://www.tenshoko.com/gaku/mde_x.html

幸せを届ける言葉

このコーナーでは、高橋美津志著「ちょっとひとこと」から「幸せを届ける言葉」をランダムに取りあげ掲載します。

「家庭教育」

世間の人は、「親の背を見て子は育つ」といいますが、最近では、親の背を見ない。「親の心、子知らず」の、身勝手な若者が増えてきている。原因の一つに、親と子の対話の欠落がある。太鼓はたたかねば、音はしない。親がだまっていたら、子に親の心は伝わらない。幼児期に、「親の心を子に知らず」、これが家庭教育の基本である。

『稿本天理教祖伝逸話篇』26

明治五年、教祖が、松尾の家に御滞在のことである。お居間へ朝の御挨拶に伺った市兵衛 ハルの夫婦に、教祖は、「あんた達二人とも、わしの前へ来る時は、いつも羽織を着ているが、今日からは、普段着のままにしなされ。その方が、あんた達も気楽でええやろ。」と、仰せになり、二人が恐縮して頭を下げると、「今日は、麻と絹と木綿の話しよう。」と、仰せになって、「麻はなあ、夏に着たら風通しがようて肌につかんし、これ程涼しゅうてええものはないやろ。が、冬は寒うて着られん。夏だけのものや。二年も着ると色が来までや。濃い色に染め直しても、色むらが出る。そうなたら、反故(ほうご)と一しよや。絹は、羽織にしても着物にしても上品でええなあ。買う時は高いけど誰でも皆、ほしいもんや。でも、絹のよくな人、ほしたら、あかんで。新しい間はええけど、一寸古うなったら、どつにもならん。そこへいくと、木綿は、どんな人でも使っている。ありきたりのものやが、

麻と絹と木綿の話

これ程重宝で、使い道の広いものはない。冬は暖かいし、夏は、汗をかいても、よう吸い取る。よければ、何遍でも洗濯が出来る。色があせたり、古うなつて着られんようになったら、おしめにも、雑巾にでも、わらしにでもなる。形がのうなところまで使えぬが、木綿や。木綿のようなのや。神様は、お望みになっているのや。と、お仕込み下された。以後、市兵衛夫婦は、心に木綿の二字を刻み込み、生涯木綿以外のものは身につけなかつた、といふ。

【解説】
結論から言うと、人はいつでも木綿のようになり、人になる存在であれと教えられた話です。しかし、現在は化学繊維の生地が主流で、木綿や絹、麻といった材質の比較を話してもなかなかわかってもらえないかも知れません。繊維が安くなって、木綿はかつて高価なものになったという風を考える人もおられるかも知れませんが、しかしそのあたりは、時代的な考証を踏まえて理解してもらいたいところです。
羽織と普段着：羽織はいわば正装・改まったときに装着する服装。
麻は夏用の生地。通気性が良くって、肌さま

とわりつかず、サラサラとした着心地が夏にうってつけ。しかし冬用としては保温性に乏しいので、防寒の役にたたない代物である。色が来る：色があせたり古くなるという意味。そのなると着物としての値段がぐんと下がります。麻は、3年くらいで色が来る。濃い色に染めをしてムラができる。：寿命が短い。絹 羽織、着物にしても、肌触りがよくて、光沢もあって、上品でいい。しかし木の自身が高価であるし、取扱が面倒、頻りに洗濯などできる代物でない。普段着として毎日着るようなものではない。裕福な人の改まった時、場所でもそそぎの着物として着用されます。だれもがほしががる生地ですが、普段着としては使い勝手がよくない。そこで、教祖は「絹のような人になったら、あかんで。」と、言われています。
おしめ・雑巾：最近では使い捨てのものが多いんですけど、このたえは実感ともなわない。雑巾も出来上がったものが売ってますね。使い古しの木綿の雑巾は姿を隠したかな。それでも麻や絹の雑巾はないですね。今日、自己主張の時代と言われます。みんな自己中心的になってます。そしてそれぞれ自分を主張しますから、バラバラにつながりが薄くなって、バラバラになっていきます。そういう現代だからこそ、「木綿のよくな心」の信仰者となって、より高い次元のつながりの原理を求められている、と受けとめたいところです。